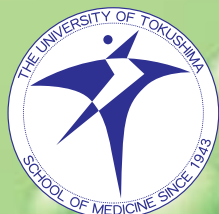


徳島大学



The University of Tokushima  
School of Medicine

# 医学部だより

第5号

2004. 1. 31

## 巻頭言

### 蔵本地区での生命科学系研究科を統合した大学院がスタート

医学部長 曾根 三郎

この4月から蔵本地区の医学、歯学、薬学、栄養学研究科を統合した大学院が新しくスタートしますので、期待される意義と役割について紹介致します。

21世紀は「生命の世紀」と言われるように、生命への理解が深まることによって、医学、薬学の飛躍的な発展による個別化医療への貢献や食料・環境問題の解決に寄与することが期待されています。急速に発展している生命科学分野において国内外での競争は激しく、当大学も研究大学としての決意を固めており、それに匹敵しさらにそれを上回る研究成果を挙げる必要性が求められています。当医学研究科は平成14年度より独立専攻系として医学専攻の他にプロテオミクス医科学専攻を設立し、分子酵素学研究センター、ゲノム機能研究センターとの密な連携により国際競争のための教育・研究の足場を築いています。



文部科学省でのヒアリング(左から寺尾、三宅、曾根、長尾、際田)

今回、平成16年度の国立大学法人化を迎え、生命科学系大学院としての生き残りを賭けた試みとして、平成14年度秋頃から蔵本キャンパス内の医学、歯学、

薬学、栄養学の4研究科を融合した統合大学院を設立する構想が黒田前医学部長、三宅歯学部長、長尾前薬学部長を中心に生まれ、その年の11月より就任した曾根が引き継ぎ、後任の際田薬学部長、寺尾前栄養学科長も加わって統合大学院設置に向けて文部科学省医学教育課との交渉を重ねてきました(写真)。交渉の中で問われた点は、徳島大学の基本構想の中でどのような将来計画を立てているのか？4研究科統合によりメリットとして何があるのか？社会の変化や問題にどう対応できる仕組みが作れるのか？社会貢献をどう考えるのか？倫理性、社会性を備えたバランスのある指導的な専門医療人育成のための教育システムは？などなど多くの問題を突きつけられました。全国的に進む国立大学の組織改革の中で、我々の抱く医歯薬栄養学統合大学院構想は10年、20年後さらに活力を生み出し発展する仕組みでなければとの思いが強く、医療をキーワードに大学院構想を根本から総合的に見直す機会になりました。

基礎生命科学を基盤に新しい医療の創出と社会の多様な要請に応える専門職業人の育成を目指す拠点として、この構想は社会的な要請として、国家的な課題に応える見地から大きな役割を果たすことが期待できます。すなわち、我が国で今後本格化する少子高齢社会において、健康で活力に満ち、安心できる生活を実現するためには、疾病の治療から予防への系統的な医療開発と幅広い専門知識を持つ医療人の育成、各専門職業人のチームワーク医療が必須となります。そのため、医歯技術、薬物療法、栄養療法などの発達

重要であることは、限られた医療資源の有効利用と医療経済の観点からも予想できます。その結果、病院での治療から在宅ケアへの展開、そして医療技術や薬物による高度先進医療から栄養療法による疾患発症予防への展開が今後の政策的な流れともなります。蔵本地区には、国立大学医学部に設置された全国唯一の栄養学研究科が設けられており、医歯薬学と栄養学が統合されることにより、医療のための栄養生命科学という新たな学問体系が構築でき、ヘルスバイオサイエンス研究部を中心に集学的な医療の確立に向けても国際的な貢献が期待できます。本学医学部が昨年獲得した

21世紀 COE プログラム拠点化を基盤に大きく羽ばたいていくことができると確信しております。

将来計画として、保健学科に修士課程の設置を図り、さらに博士課程を設けて保健学分野での専門医療人の育成を図ることも視野に入っており、総合力のある大学院へと変貌を遂げることになります。

最後に、この度の統合大学院設置に向けた取り組みには齋藤前学長、青野学長、河野前経理部長(現在、神戸大学)、平井事務部長をはじめ多くの方々のご尽力並びにご協力のお陰であることを申し添え感謝いたします。

## 蔵本地区に誕生する医歯薬栄養学の統合大学院とは？

医学、歯学、薬学、栄養学の4研究科が重点化され、一つのヘルスバイオサイエンス研究部とそれぞれの教育部からなる生命科学系統合大学院構想が平成16年4月より実現します。この構想は社会的な要請として、生命科学の骨格をなす医学、歯学、薬学、栄養学を発展させるとともにそれぞれの領域での専門的で指導的な医療人の育成を図ることを目標としており、新しい組織として研究部、教育部、学部から構成されます。今回の4研究科統合大学院は新しい教育システムを作り、人材の育成の見地から大きな役割を果たすことが期待できます。

今回の改革によりどのように変わるかをQ&A方式にて概説します。

Q

ヘルスバイオサイエンス研究部はどのような組織構成ですか？

A ▶ヘルスバイオサイエンス研究部は8つの部門からなり、一つの部門はいくつかの講座からなります。さらに、一つの講座はいくつかの分野から構成されます(図1)。いくつかの部門、講座は教育、研究に関連させた形で医学、歯学、薬学、栄養学の分野を混成させた構成となっております。その結果、患者さんのための先進的な医療の創生に向けて研究者の独自の発想やアイデアをもとに医学、歯学、薬学、栄養学の壁を越えての共同研究が可能となります。

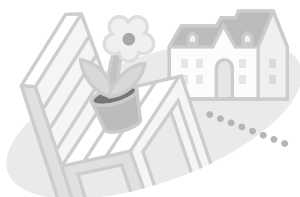


図1 ヘルスバイオサイエンス研究部

### 統合医歯創生科学部門

先端医歯創生科学講座(医学3分野)  
分子口腔医学講座(歯学2分野)  
薬物機能制御学講座(薬学3分野)  
食品栄養設計学講座(栄養1分野)  
社会環境衛生学講座(医歯薬栄養各1分野)

### 発達予防医歯学部門

発生発達医学講座(医学3分野)  
健康長寿歯科学講座(歯学3分野)  
病態予防医学講座(医学2分野)

### 神経情報医学部門

情報統合医学講座(医学4分野)  
病態情報医学講座(医学4分野)  
感覚情報医学講座(医学3分野)

### 再生修復医歯学部門

顎口腔病態制御学講座(歯学3分野)  
顎口腔再建医学講座(歯学5分野)  
顎歯病態修復医学講座(医学3分野)  
生体防衛腫瘍医学講座(医学3分野)  
感覚運動系病態医学講座(医学4分野)

### プロテオミクス医科学部門

生体制御医学講座(医学6分野)

### 生体システム栄養科学部門

薬物機能制御学講座(歯学5分野)  
栄養医学講座(栄養3分野)  
医療栄養科学講座(栄養2分野)

### 創薬資源科学部門

機能分子創製学講座(薬学3分野)  
医薬資源科学講座(薬学3分野)  
資源分子探索学講座(薬学2分野)

### 生体情報薬科学部門

薬物情報解析学講座(薬学3分野)  
分子情報薬学講座(薬学3分野)

Q

新しい統合大学院として学生の所属はどのように変わりますか？

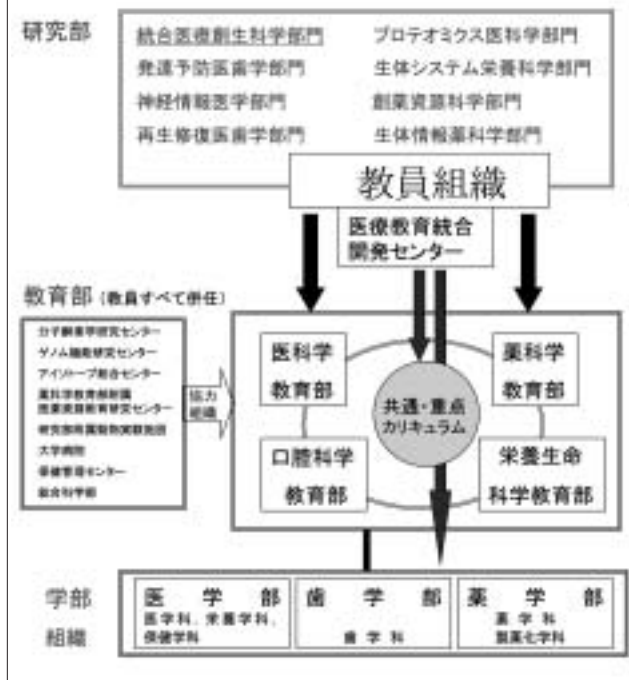
A ▶ 現在、蔵本地区には、医学部、歯学部、薬学部の3学部があり、教員と学生と一緒に所属しています。それぞれに大学院として研究科があります。今回の再編により、医学、歯学、薬学、栄養学の4つの研究科はそれぞれ教育部としてスタートします。学部学生は従来どおりの学部所属となります。大きく変わる点として、大学院生が所属する医学研究科、歯学研究科、薬学研究科、栄養学研究科はそれぞれ医科学教育部、口腔科学教育部、薬科学教育部、栄養生命科学教育部として名称が変更され、それぞれの専門性と個性を保持しつつ医療人としての共通教育を重点的にを行い、国際的に活躍できる指導的な人材の育成が可能となります。その結果、将来の我が国の生命科学、医療科学、健康科学の一端を担う基礎的な学問体系を修得し、社会の進化に対応して医歯薬栄養共通領域の素養を持つ新たな学問分野を開拓することのできる人材の養成が可能となります。また、4教育部間には特色ある共通カリキュラムを編成し、新たな学問分野の展開に対応できる人材の育成を行うことができます。

Q

各学部の教員はどこの所属になりますか？

A ▶ 医学部医学科・栄養学科、歯学部、薬学部の教員(教授、助教授、講師、助手)は新設するヘルスバイオサイエンス研究部に移り、同じ所属となります(図2)。その結果、医学、歯学、薬学、栄養学のそれぞれ縦割りの研究システムを超えて、医療に関わる社会の進化やニーズに対して迅速にかつ効率的に対応でき、自由にかつ目的に応じて柔軟な研究プロジェクトを横断的に立ち上げることが可能な組織形態となります。将来的に、ヘルスバイオサイエンス研究部所属の教員は、4つの教育部と3学部への教育を担当する事が可能となり、幅広い教育と研究指導が実現することになります。

図2 大学院医学、歯学、薬学、栄養学の各研究科の統合による「ヘルスバイオサイエンス研究部」および「教育部」設置の概要



Q

事務部門は変わりますか？

A ▶ 平成 15 年 10 月から医学、歯学、薬学の事務部門(総務課と学務課)は既に一つとなって運営されております。今回の医・歯・薬・栄養学の統合大学院スタートによって、教職員一体となった運営と管理が可能となります。

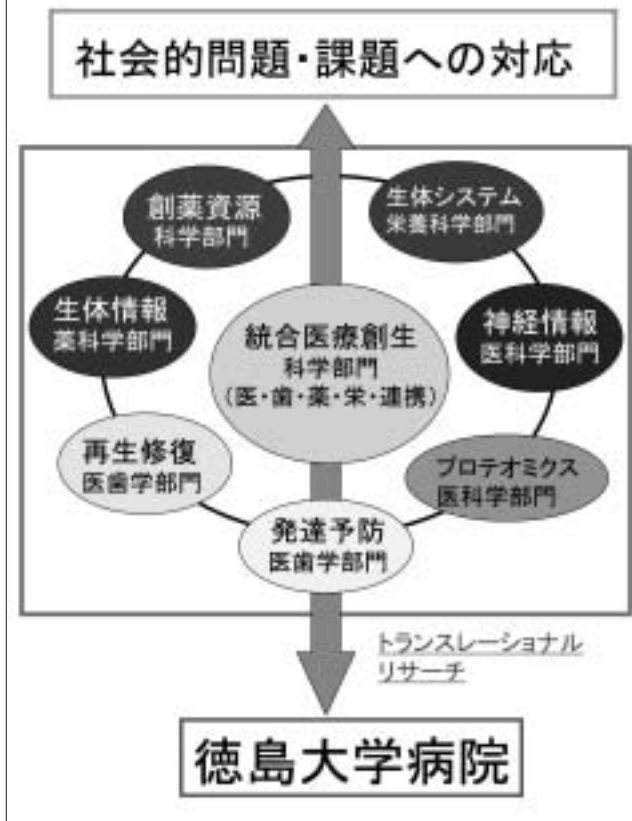
Q

医学、歯学、薬学、栄養学の教員がヘルスバイオサイエンス研究部所属になり、そのメリットは？

A ▶ 今回の目玉として、医学、歯学、薬学、栄養学の各分野が一緒になって、社会的な課題や問題に対応するために統合医療創生科学部門が設けられました(図3)。例えば、ポストゲノムに対応したプロテオミクス研究からの創薬、育薬の推進、様々な疾患遺伝子の解明とそれに基づくオーダーメイド医療を可能とする科学的・技術的基盤の形成、バイオテクノロジー等の活用により良質で安全な食料の安定的な供給を開発していくことが期待されています。



図 3



### Q ヘルスバイオサイエンス研究部と教育部、学部との関係は？

A▶ヘルスバイオサイエンス研究部所属の教員は、大学院教育部、学部の教員を兼任する形で教育・研究指導を担当することになります。教育部教授会、学部教授会で教育に関わる所掌事項を審議し、決定していきます。

### Q 大学病院との連携は？

A▶高齢化社会を迎え、患者さんにやさしい医療を創生し、提供するために医科歯科の高度先端技術や基礎生命科学の成果を臨床へと応用していくための橋渡し研究トランスレーショナルリサーチの基盤を整備し、臨床試験管理センターと連携することにより、実験的医療の推進による高度先進医療の開発、さらに標準的医療の確立に向けて取り組むことが可能となります。患者さんを対象とした臨床研究の実践には科学性、医学的妥当性だけで

なく、ヘルシンキ宣言にもとづく生命倫理の遵守が前提となりますので、徳島大学病院臨床試験管理センターとの連携にて進めていくことが期待されます。

### Q 分子酵素学研究センター、ゲノム機能研究センターとの関係は？

A▶両センターの教員はヘルスバイオサイエンス研究部に所属しませんが、従来と同じく、関係する教育部に所属する大学院生の教育・研究指導には協力講座として参加します。

### Q 学生教育・研究への波及効果が期待できますか？

A▶医学、医療の急速な展開により、国民や社会のニーズが複雑化しており、それらに対応するためには全人的なチーム医療が求められています。医療の基本となる倫理性、法律遵守、コミュニケーションスキルなどを学ぶことが各学部の学生に要求される時代となっており、統合医療教育を行える環境が今回の統合大学院化により可能となります。また、医学、歯学、薬学、栄養学の4研究科を融合させ、統合化することにより医療人として共有すべき幅広い専門知識と経験を身につけた人材の育成が可能となり、チーム医療による社会貢献が期待できます。

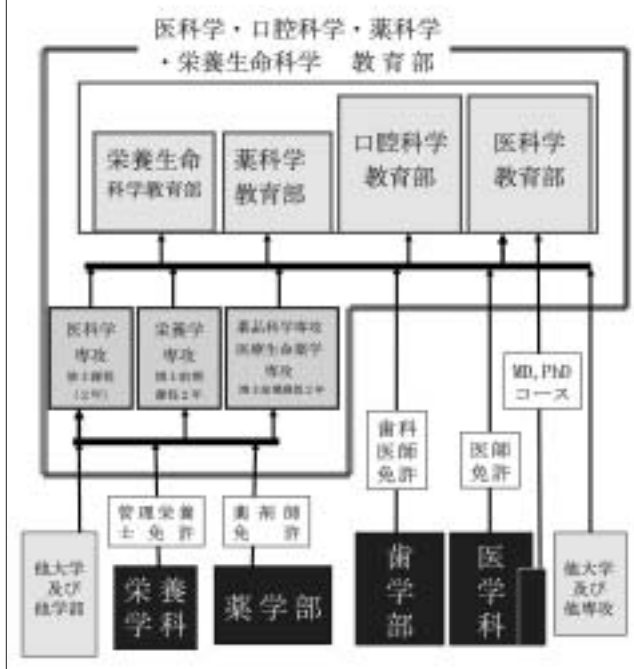
医療人育成教育段階で、共通の場で学ぶ過程を通して他職種の医療業務の基本を理解し、将来、職種の異なる医療人と連携協力してチーム医療を円滑に行う能力を身につけることができます。さらに、チーム医療で築いた人間関係を基に新しい共同研究の推進も期待できます。

### Q 学部を超えて修士課程、博士課程への進学が可能ですか？

A▶従来は、各学部を卒業した後、縦割りのためにそれぞれの修士課程、博士課程への進学しかできませんでしたが、横断的に門戸は開かれます。今回

の統合大学院設置により、大学院生には修士課程、博士課程への進路に選択肢が広がり幅広い人材の育成を行うシステムができます。例えば、4年制の学部卒業生は医科学修士課程、人間栄養科学修士課程、薬科学修士課程のいずれにも進学することが可能となります。また、修士課程から博士課程への進学も複数の選択肢が確保される予定です(図4)。各教育部では、単位互換性を進めて幅広く専門教育を受けやすい環境を整えることができます。学部から大学院への一貫した教育システムも含めて、そのような企画や運営を新しく設置される医療教育統合開発センターが担うこととなります。

図4 大学院教育部での学位取得までの流れ(教員相互乗り入れと専攻間単位互換制導入)



発症予防への展開が今後の政策的な流れでもありません(図3)。

Q

所属はどのように記載するのですか？

A▶ 医学部学生の場合、現在と同じく徳島大学医学部医学科、栄養学科あるいは保健学科となります。大学院生の場合、徳島大学大学院医科学教育部医学専攻、プロテオミクス医学専攻、あるいは徳島大学大学院栄養生命科学教育部人間栄養科学専攻となります。一方、研究部教員の場合、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 部門 講座 分野となります。(日常的には、部門を略すことになるかもしれませんが) 英文での表記は次のようになります。

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部  
The University of Tokushima Graduate School  
Institute of Health Biosciences

徳島大学大学院  
The University of Tokushima Graduate School

医科学教育部  
Graduate School of Medical Sciences  
医科学専攻  
Master Course of Medical Science  
医学専攻  
Course of Medicine  
プロテオミクス医科学専攻  
Course of Proteomics Medical Science

栄養生命科学教育部  
Graduate School of Nutrition and Bioscience  
人間栄養科学専攻  
Course of Human Nutrition

Q

21世紀の医療を担う人材育成に結びつきますか？

A▶ 我が国で今後本格化する少子高齢社会において、健康で活力に満ち、安心できる生活を実現するためには、疾病の治療から予防への系統的な医療開発と幅広い専門知識を持つ医療人の育成が必須となります。そのためには、医歯技術、薬物療法、栄養療法などの発達が重要であり、限られた医療資源の有効利用と医療経済の観点から、病院での治療から在宅ケアへの展開、そして医療技術や薬物による高度先進医療から栄養療法による疾患

Q

保健学科にも修士課程、博士課程が計画されていますか？

A▶ 保健学科は平成14年度に開設され、現在2年生と学年進行中です。平成18年度には保健科学教育部が設置され、修士課程開設の準備が進められています。将来的には博士課程も整備されると、チーム医療を担う指導的な専門医療人の育成が整うこととなります。大学院設置後は保健学科の教員もヘルスバイオサイエンス研究部所属となり、社会に対応できるシステムが整うこととなります。

## 医療教育統合開発センターの役割は

医学部長補佐 玉置俊晃



徳島大学蔵本地区に医歯薬栄養学の統合大学院が設置されるにあたり、研究面だけでなく教育面においても統合のメリットを生かすために、医療系学部全体の学部から大学院までの一貫性を持った医療人育成教育改革を研究し支援するために「医療教育統合開発センター」の設置

を計画した。

20世紀の後半から、爆発的な生命科学の進歩および医療現場で急激な技術革新が起こっている。さらに、安全で質の高い医療に対する社会のニーズは、近年我が国において急激に厳しさを増している。各医療機関・行政とも努力を重ねているが、安全で質の高い医療の確保のためには、根本的には医療人育成教育改革が不可欠である。医学部では他学部在先駆けて「医学教育支援室」を設置し、医学教育改革を推進し講座の壁を越えた統合教育を実践してきた。同様に、栄養学・保

健学・歯学・薬学分野でも、医療系教育改革の必要性が議論され医療人の育成教育改革が全国規模で進みつつある。「医療教育統合開発センター」は、医療系教育について専門的に研究し、その成果を教育現場に着実に還元し支援する研究者・実践者の集団である。さらに、医療系各学部及び教育部の固有の教育課程及び統合教育カリキュラムの企画立案・実施を支援するとともに、人的資源の開発を推進する。徳島大学蔵本地区では、「医療教育統合開発センター」が中心となり医療系各分野での統合教育を実践することが可能になる。共同科目・実習を行うことにより、学生間のコミュニケーションの促進や、異なる職種を目指す学生間に相互理解をもたらす。また、教員間のコミュニケーションの促進は、医療系統合教育カリキュラムを整合性のとれた効果的なものにするであろう。さらに、間接的には統合大学院内で学際的研究を推進するためにも役立つ。このように「医療教育統合開発センター」は、統合大学院の中核をなす重要な役割を担うセンターになる。

## 国立大学の法人化

副学長・発生発達医学講座 小児医学分野  
黒田泰弘



国立大学の法人化は、大学改革の根幹であり、自律的な環境の下で国立大学を一層活性化し、優れた教育や特色ある研究に積極的に取り組む、より個性豊かな魅力ある国立大学を実現すること等を目的としています。平成16年4月1日から、現在、

国が設置している国立大学は、国から独立した国立大学法人が設置する大学になります。すなわち、現在、「国」が設置している徳島大学は、「国立大学法人徳島大学」が設置する徳島大学になります。すでに、昨年10月からは、今までの教育担当副学長と学術研究担当副学長に加えて新たに総務担当副学長が設けられました。法人化後は、さらに管理担当副学長と経営担当副学長が加わり、学長と副学長5名とで「国立大学法人徳島大学」の役員会を組織して大学を運営することになります。したがって、法人化後、大学は、組織、運営、人事、財務、資産、評価の面で今までとは大きく変わり(別表を参照)大学の自由度はある程度増しますが、それ以上に大学の責任も重くなります。とくに、

経営面での大学の努力が強く要求されます。また、今までと違って職員は公務員でなくなり、大学の運営に学外者がかわり、大学が外部から評価されるようになります。

ここで、「国立大学法人」制度の概要についてまとめます。

### \* 「大学ごとに法人化」し、自律的な運営を確保

- ・国立大学は、国の行政組織の一部であったが、各大学に国から独立した法人格が付与されます。
- ・予算、組織等に対する国からの規制は大幅に縮小され、予算、組織等は大学の責任で決定されます。

### \* 「民間的発想」のマネジメント手法を導入

- ・「役員会」制の導入によりトップマネジメントを実現します。
- ・「経営協議会」を置き、全学的観点から資源を最大限活用した経営を行います。

### \* 「学外者の参画」による運営システムを制度化

- ・「学外役員制度」(学外有識者・専門家を役員に招聘)を導入します。
- ・経営に関する事項を審議する「経営協議会」に学外者が参画します。

・学長選考を行う「学長選考会議」にも学外者が参画します。

＊「非公務員型」による弾力的な人事システムへの移行

- ・能力・業績に応じた給与システムを各大学の責任で導入します。
- ・兼職等の規制を撤廃し、能力・成果を産学連携等を通じて社会に還元します。
- ・事務職を含め学長の任命権の下での全学的な人事を実現します。

＊「第三者評価」の導入による事後チェック方式に移行

- ・大学の教育研究実績を第三者機関により評価・チェックします。
- ・第三者評価の結果を大学の資源配分に確実に反映します。
- ・評価結果、財務内容、教育研究等の情報を広く公表します。

＊ ＊ つぎの点が独立行政法人通則法に基づく独立行政法人は違います。

・「学外役員制度」など、学外者の運営参画を制度化すること。

- ・客観的で信頼性の高い独自の評価システムを導入すること。
- ・学長選考や中期目標設定で大学の特性・自主性を考慮すること。

法人化は、民営化とは違い、今までと同じように毎年、運営費交付金と言って国から大学の運営費がもらえます。しかし、大学は、6年毎に教育、研究、経営などの目標・計画を設定して実行し、国は、その6年間の達成度を評価してその評価結果を運営費交付金に反映させます。すなわち、今まで以上に実績主義になりますので、大学の教職員一人ひとりが、教育、研究面だけでなく外部資金の導入や経費削減など経営面でも今まで以上に努力しなければなりません。しかし、大学は、教育、研究を行う学問の場であることを忘れてはなりません。

評価	資産	財務	人事	運営	組織	現 状
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 全学的な目標・計画が不明確</li> <li>● 原則として各大学による自己評価を実施</li> <li>● 評価と予算の関係が見えにくい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 土地・建物は国有財産(国有財産法の適用)</li> <li>● 特許等は国又は個人所有</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度間の繰越は原則不可</li> <li>● 全大学一律の授業料設定</li> <li>● 全大学を一つの会計で管理(「国立学校特別会計」)</li> <li>● 費目の区分を越えた流用は原則禁止</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 幹部事務職員は大臣任命</li> <li>● 国家公務員制度下の制約(「国家公務員法、給与法等による規制」)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 副学長等による学長補佐体制</li> <li>● 原則として学内者だけで運営(評議会中心の運営)</li> <li>● 学内者だけで選考(全学選考を実施)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教職員定員の配分は国による管理</li> <li>● 国の行政組織の一部</li> <li>● 内部組織の細部まで概算要求・機構審査の対象</li> </ul>	現 状
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大学ごとの目標・計画を明確化(6年間の目標・計画を設定 戦略的経営と大学の個性化を促進)</li> <li>● 第三者評価によるチェック(有識者の委員会が達成度と水準を評価)</li> <li>● 評価結果の交付金等への確実な反映</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 土地・建物等は法人所有(弾力的な財産管理。但し処分には大臣認可が必要)</li> <li>● 特許等の法人所有が可能(効率的・弾力的な特許等の管理)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度間の予算繰越も可能幅のある授業料を設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学長に人事権を一元化(各大学で独自の人材登用・養成)</li> <li>● 非公務員型による弾力的な人事(兼職兼業の緩和、業績に応じた弾力的な給与、多様な職員採用等)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 役員会によるトップ・マネジメント(学長・理事による役員会を制度化)</li> <li>● 学外者の参画による運営(学外役員、経営協議会(半数以上は学外)の新設)</li> <li>● 学長選考方法を見直し(学内・学外同数の学長選考会議で適任者を選考)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 国から独立した法人格</li> <li>● 基本組織(学部等)以外は各法人の判断で内部組織を随時に変更</li> <li>● 教員ポスト等の学内配分は大学が決定</li> </ul>	法人化後の国立大学の姿

## 就 任 の ご 挨拶

病態情報医学講座救急集中治療医学分野  
教授 西村 匡 司



本年1月1日付けで病態情報医学講座、救急集中治療医学分野に就任しました西村匡司です。本学の集学医療部門は全国の模範となる施設であり、この素晴らしい施設で働く機会を得たことを誇りに思っています。重症患者の治療を行う中央診療部門の医療は病院全体の医療に大きく影響します。施設に恥じない医療、教育を行えるよう微力ながら全力を尽くしていく覚悟です。高い医療レベルを維持するためには各診療科の先生との緊密な連携が必要不可欠であり、各診療科の先生方の協力なくしてはこの部門の医療は成り立ちません。皆様方のご支援・ご指導お願い申し上げます。

## 学科ニュース

\*\*\* 医学科から \*\*\*

# 医学科の改革から ヘルスバイオサイエンス研究部の活性化へ

医学科長 福井 義浩



今年の4月から、大学院4研究科が統合されて医学科の全教員は大学院ヘルスバイオサイエンス研究部所属となります。大学院生は医科学教育部に所属し、学生は今までどおり医学部医学科所属です。研究活動は今まで

どおり分野単位で行われますので、教育・研究ユニットとしての医学科の役割は益々重要になるのではないのでしょうか。ヘルスバイオサイエンス研究部を生命科学の研究拠点とするために、医学科入学時から学生の潜在能力を引き出し、研究遂行能力を伸ばす仕組みを作り、大学院に進学したら直ぐ研究活動を始められるようにしたいと思っています。

このことは、決して学部教育を軽視するという意味ではありません。医学科の役割は、言うまでもなく先進医療を担うと同時に地域社会から信頼される臨床医を育てることです。教育環境を整備し教育カリキュラ

ムを改革、重点化し、将来の高度先進医療、生命科学研究を担う若手医師や研究者を育てる環境作りが必要です。曾根医学部長は「学生サービスの重視」を常々話されています。学生あつての大学で、教職員のために大学が存在しているわけではないことを我々は肝に銘ずべきでしょう。

今回の大学院統合を前向きに捉え、大学院教員の本務は高度な研究活動であり自己の研究遂行能力を磨くことが、学生、大学院生の教育にも役立つと考えたほうが良いと思います。研究大学を目指して、外部資金を積極的に導入し、研究指向の魅力ある教室作りを行うことが重要となっています。言い換えれば、学部教育といえどもスタッフは研究遂行能力を備えているのが望ましいと私は考えています。教員自身が自己の研究者としての資質を高め、積極的に研究活動を行うことが、結果的に学生や大学院生の教育に還元できる最短の道であると思います。

\*\*\* 栄養学科から \*\*\*

# はばたく 栄養学科

栄養学科長 中屋 豊



少し後悔していますが、この原稿に「はばたく栄養学科」という華々しいタイトルをつけました。この題に恥じないような栄養学科にしていきたいという期待もこめてのタイトルです。

徳島大学医学部栄養学科は国立大学医学部に併設する唯一の栄養学科として歩んできました。全国の栄養学科の中ではいつも注目されてきた学科ですが、学内では医学科の影に隠れそうになっています。学生には「医学科は医学の分野では上がいるが、徳大の栄養学科はアメリカのハーバード、日本の東大のようなものだ。」と言

い聞かせております。文部科学省もいつも徳島大学には特徴のある栄養学科があることを強調してくれていると聞いています。この栄養学科も、去年は21世紀COEに「ストレス制御をめざす栄養科学」という題で採用され、また4月からは医歯薬栄養統合大学院大学として出発することが決まり、栄養学科もその一員として加わります。研究棟も新しく改装され、これで、研究の体制が整いました。本年はさらに躍進をと教職員が一丸となり努力しているところです。

今年から研究だけでなく、学生の教育、臨床研修にも力を入れようと考えています。医学部にある栄養学科として、残念ながらこの特権を今までは十分に生かしてなかったようです。大学病院での栄養サポート



チーム（NST）も少しずつですが、定着してきており、学生の臨床栄養学の教育に力を注ぐ予定です。病院に「食と健康増進センター」が立ち上がり、さらに臨床の栄養管理が充実するものと思われます。

以前は、看護師、薬剤師などの医師以外の医療従事者をパラメディカルと呼んでいました。医師を助ける、あくまでも補助的な役割を行う人と定義していたためでした。しかし、現在の医療は高度になり、医師一人ですべてを管理することが難しくなってきました。現在はグループ診療という考え方が進み、それぞれの専門家がそれぞれの得意な分野で知識を用い、一人の患者さんの管理を行う必要が生じてきました。こういったことより、看護の専門家、薬理の専門家、栄養の専門家などの種々の分野の知識も必要になり、これらの人達は医師と同等の立場で専門知識を提供するという意味で「コメディカル」という名称が用いられるようになりました。

今までの栄養士はあまり病棟に行くこともなく、患者とのコミュニケーションは医師からオーダーのあった例の栄養指導をおこなうだけでした。これからの栄養士はコメディカルの一員として、自分の専門の知識

を高め、他の医療従事者から信頼されるようになる必要があります。それだけではなく、他の医療従事者の言っていることを理解できることが必要となります。高度な栄養管理を行うためには、今までの栄養士に関係のないと思われるような医学知識も必要になってくることと思います。すなわち、病気の間を相手にするのは病気自体のことも知る必要があり、その病態、症状、治療などについても、栄養以外の知識が必要になります。

栄養学科の講義も1昨年から大きく変わり、徳島大学では臨床栄養に重点をおいた教育内容が大幅に増加しました。これから卒業する学生たちには、一医療人としてチーム医療の中で能力を発揮できるように、育てていきたいと考えています。また、栄養士の卒後研修にも大学を利用していただくように工夫したいと考えています。新しいカリキュラムが受講できる制度を取り入れ、社会人の再研修の場として提供したいと考えています。

いろいろと夢を書きましたが、栄養学科が羽ばたくように努力したいと考えています。

\*\*\*保健学科から\*\*\*

## 申年を迎えて

保健学科長 前澤 博



積極性に富んだ申の年を迎えました。穏やかな天候のうちに年が明けましたが、保健学科には厳しい一年になると思われます。平成16年度に予定されていた教官の配置が昨年末の文科省内示で繰り延べとなり、法人化と相まって我々を取り巻く状況

は厳しさを増しています。しかし、教育研究を滞りなく進めるために知恵を出し、協力して乗り切りたいと思います。この2、3月には学科開設後3度目の入試を行いますが、4月には希望と活力に満ちた新生を迎えられるものと期待しています。

教育効果と勉学意欲の向上のため、平成15年度から進めている視聴覚機器や専門教育用機器・設備の整備をさらに充実し、また学科内スペースの有効利用を行って学生自習室の整備を行う計画を立てています。アメニティーの改善ではトイレや老朽損傷箇所の改修が昨年末から始まりました。初の学生国際交流として、

看護学専攻の学生数名が3月にフロリダアトランティック大学（FAU）への短期研修旅行を行う予定です。視野を広げ、モチベーションを高める機会になると考え、今後の交流拡大に期待します。

平成18年度の大学院設置に向けて、今年は申請の準備が本格化したします。昨年12月には中国・四国地区の学生、専門高校生および社会人を対象に大学院の必要性についてアンケート調査を行いました。調査にご協力頂いた方々に深く感謝いたします。充実した大学院の設置に向けて教官一同努力いたします。

今年は法人化財務会計も予定され、事務職員の方々と教官が一体となった学科運営が不可欠です。当学科教官は教育研究の充実に努力して参りますが、他学科、他学部および附属病院の諸先生、医療技術系職員および事務職員の方々、また学外関係諸機関の方々には今後とも当学科に対する一層のご理解とご鞭撻をいただきたくお願い申し上げます。

## 21世紀 COE・医学系研究教育拠点： 拠点形成の現況について

拠点リーダー 生体情報内科学 松本俊夫

### 1. 平成 15 年度 COE 研究助成の交付

40歳未満の若手研究者を対象に拠点内公募し、peer review の上で1件当たり150万円を6件、75万円を5件採択し交付した。

### 2. 平成 16 年度 COE 特別研究員・大学院研究員の内定

公募を行い学内外の18名の応募者から全拠点メンバーによる選考の結果、今年度からの継続1名に加え10名の特別研究員の採用を内定した。また大学院研究員は12名の採用を内定し、何れも交付決定を待って正式に採用する事とした。

### 3. COE プロテオミクス解析室の整備

COE プロテオミクス解析室の改修工事は終了し、超低温フリーザーとタンパク質検索同定システム(マスコットクラスター)は既に納入され FT-MS は2月末に納入予定である。NEC ソフト、バイオソリューション社と谷口教授の共同開発によるプロテオミクス試料データ管理システム、同サーバーも間もなく納入され、臨床インフォマティクスのシステ

ム確立を目標として共同研究が予定されている。先端医研の松浦技術職員が出向し11月採用の芥川技術補佐員と共にプロテオミクス解析技術を研修中である。

### 4. 第1回 COE 徳島プロテオミクスシンポジウムの開催

昨年12月4日に長井記念ホールで「ポストゲノム医学の幕開け - プロテオミクス研究はどう進展するか - 」と題して第1回 COE 徳島プロテオミクスシンポジウムが開催された。217名の参加者を数え活発な討論がなされると共に、昼休みにはミキサー形式の昼食会も開催され、盛会裏に終了した。

第2回は COE 国際シンポジウムとして平成16年8月23日(月)午後開催される予定である。米国から David Mangelsdorf, Kenneth Korach の両先生に加え、東京大学の加藤茂明、宮園浩平先生を始めとする学内外の研究者を集め、核内受容体を介する転写調節と転写共役因子のプロテオーム解析等を中心テーマとして取り上げる予定となっている。

## 21世紀 COE プログラム

### 「ストレス制御をめざす栄養科学」の進捗状況(2)

拠点リーダー 栄養学研究科 武田英二

平成16年10月に21世紀プログラム COE 拠点として発足以来、3ヶ月が経過しました。12月には栄養学教科棟2階のコ・ラボ施設の整備が完了し、栄養科学 COE 推進室と臨床医学・遺伝子発現情報データベース集積システムの稼働が開始しました。4名の COE 教員、7名の COE 研究員、11名の RA を採用して、以下の教育研究を進めている。

#### 1. 研究活動

事業推進者全員が月1回、またそれぞれの3つの研究プロジェクト班も月1回集まって、成果の報告および研究推進を図っている。ストレス評価技術開発班はうつ病患者末梢白血球遺伝子発現のクラスター解析やバイオマーカーを探索するとともに、新規ナノデバイスを Nat Biotech に報告した。高次機能食品開発班はセントジョーンズワートなど種々抗ストレス食品成分の効果や高次機能への効果を、浸水モデルや断眠モデル

動物を用いて評価している。臨床栄養学評価班は小児の精神・心理疾患解析および企業が有する食品シーズを用いたヒトでの抗ストレス評価を進めるとともに、ヒトでの食品機能評価系構築を進めている。

#### 2. 教育および社会活動

11月14日、青藍会館にて宮尾益知先生による「小児の精神・心理疾患」講演会を開催した。

11月18日、東京ダイヤモンドホテルにて国際シンポジウム「COE 拠点形成: 栄養科学が招く未来」および「徳島大学栄養科学 COE フォーラム」を開催した。大学、研究所および企業から100名以上が出席し、本 COE プログラムに関する建設的な意見が寄せられた。12月8日、長井記念ホールにて COE 国際ワークショップ「Potential Health Effect of Dietary Polyphenols」を開催した。国内外研究者9名の発表と大学院生など約150名が参加して活発な討論が行われた。

## ● 附属図書館から ●

## さらに開かれた図書館をめざして

附属図書館蔵本分館長 泉 啓介



学生時代から附属図書館を利用してきた私にとって蔵本分館の建物は随分きれいになり、開館日数が増え開館時間も延長されて快適に利用できると感じています。私もそうなのですが、最近は研究者の多くが図書館には足を運ばずに研究室のパソコンでPubMedを開いて英文雑誌

のアブストラクトを読み、必要な論文のPDFファイルをダウンロードして読むという利用方法をとっているものと思います。従って蔵本地区3学部を中心に位置する蔵本分館はさらに学部学生の勉強部屋・交流の場としての充実を図って行きたいと思っています。国試の勉強をする学生を対象に24時間開館を検討したのですが、希望する学科が少ないこともあり運営委員会では

今後の課題としました。

現在最も重要な課題は、限られた予算でもって毎年値上がりする外国雑誌をいかにうまく購入するかということです。蔵本分館では医、歯、薬および各研究センターの研究の共通テーマである生命科学に関するコアジャーナル(中核雑誌)を設定しています。冊子体の購入を止めて電子ジャーナル化を図ってはいますが、雑誌の高騰ぶりは独法化後の各部局の予算を圧迫しかねない状況にあります。分館運営委員会は2005年以降のコアジャーナルの経費を2003年の額に据えおくことにしました。6月までに雑誌の選定を行うこととなります。

自分たちの論文引用回数を調べたり、よく引用される論文を探し出すためのWeb of Scienceの導入、講座購読雑誌の返納が難しい等の問題も抱えています。ご理解、ご協力をお願いいたします。

## ● 医学研究科から ●

## 「分からない！」

医学研究科教育・研究委員長 中 堀 豊

自分がアメリカのどこの大学に通っていて、そこを卒業したのかどうかも分からない。という世にも不思議な国会議員が話題になっていますが、何か、それとあまり変わらないような状況が起こりそうなのが現状です。目下のところ、「分からない！」というのが、全てのキーワードです。実際の原因がどこにあるのかは分かりませんが、法人化という名の下に、今日の話と明日の話はしばしば食い違っているので留意してください。蔵本地区の大学院統合のための会議があり、そちらは玉置学部長補佐が精力的に進めていただいているので、分からない点はそちらにお任せしたいと思っています。事務で確かめてください。

論文申請について実務的な話をひとつしたいと思います。皆さんのお世話を事務官がしておられますが、彼らはもちろん、自分で研究をしたり、論文を書いたりしているわけではありません。一方、申請する人は普通は初めての経験ですので、事務文書を作るときにやや、齟齬があるようです。3月を控え、論文提出者が多くなったところで問題になったことですが、「業績内容」には、主論文と参考論文とその他の論文、所属学会だけで済むならそのようにして下さい。「業績」として他に書くべき項として「学会発表」「その他」の項がありますが、よほど、名誉ある学会の発表を強調したい、また逆に主論文だけではちょっと心もとないということがない限りできるだけ書かないで下さい。教育研究委員会ではほとんど評価していません。せいぜい数個にして下さい。あくまで、査読を通ったもの、

原則的には投稿料を払って載せてもらうものを業績と考えています。

文部科学省は、全国規模の高校3年生の学力調査結果を1月23日に発表し、それをうけてマスコミは「学力低下」が起こっており、文科省が「指導の改善が必要」と答弁したと報道しています。これは、全くおかしな話です。日本の方針としてはめずらしく、十年來の長期目標・長期計画を立案し、「ゆとり教育」の推進を掲げ、着々と制度化し、予算化し、目指してきたものの評価が今回出たわけです。「大大大(10個くらいつけてあげたい)成功」ではありませんか。今回の結果を待つまでもなく、既にインドや中国や韓国より若者の学力が劣る国に(長期目標どおりに)なったわけでありますから、満点以上の評価が下されてよいはずですが、マスコミの論調を聞いているとあたかもそれが悪い事のように見えます。

法人化、中期目標・中期計画も、あれもこれも盛り込んでありますが、目標どおりにできたからといって、「それがなんなの?」と言われるのがやる前から明らかであります。そもそも、学問をするのに、物を知りたいと思って勉強するのに、知を進めたいと研究するのに、理由づけが要るのでしょうか。先日、「英語論文作成入門」で市原明先生のご講義がありました。少なくとも、この先数百年の科学の考え方、やり方にはそう大きな変化は起きないように思いました。いつの時代でも、本物は本物で通じるのでしょう。

## ● 教務委員会から ●

## 教育問題あれこれ

教務委員長 田代 征記

教務委員会および医療教育統合センターで現在検討しています2,3の問題点を述べて皆さんの理解を深めて戴きたいと思えます。

1999年(平成11年)からカリキュラム小委員会を設立し、新カリキュラムの検討を行い、2001年(平成13年)4月から学生教育支援室(現在、医療教育統合支援センターに改名)を立ち上げて、医学のearly exposureを目指して、医学入門(看護体験学習、老人保健学習など含む)、人体の構造と機能(1)(解剖)などが1年生の後期から開始され、人体の構造と機能(2)と病態診断の基礎(基礎科目のおもなもの)を2年生までに終わらせ、3,4年生にチュートリアル・ハイブリット教育と5,6年生にクリニカル・クラークシップ教育を一齐に導入した。新カリキュラム導入後3年が終わろうとしているが、その評価法についての検討がなされ、2003年9月からチュータの評価(学生、チュータ自身からの評価)、yellow cardの導入(各コースで

の単独の合否が決めにくいので、yellow cardを発行し、統合試験の前のチュートリアルコースの合否の判定に使用する)をしてチュートリアルの評価法を確立し、教育の実をあげたいと考えていますのでご協力お願いいたします。もう一つの問題は平成17年の医師国家試験の日程が2月中旬に早まることに伴う卒業試験のあり方を検討した。卒業試験をなるべく早く終わらせる必要があるため今年の9月の第2週から開始し、また関係ある科目を同日に行うことにして、期間を短縮し、11月中に終了し、翌年1月には卒業判定を行い、医師国家試験に備えて仮卒業証書が発行出来るようにしたことである。

まだまだ、その他共通教育の見直しや栄養学科、保健学科の教育など沢山の検討すべきことが山積しているが、また今年4月からは医・歯・薬学部・栄養学科統合の大学院構想が発足し、現在医歯薬栄養統合教育の実践を如何にやっていくかが検討されております。

## ● 学生委員会から ●

## 「蔵本祭と雨」

学生委員長 佐野 壽昭

昨秋11月1日～3日に行われた大学祭(蔵本祭)はまたも雨にたたられた。2日目の屋外企画は午前中に中止になり、3日目は雨中での開催となった。ステージ企画と売店は文化祭の華であり、目玉である。これが中止や雨天決行になったことは準備を進めてきた学生諸君にとって気の毒としか言いようがない。一方、屋内企画の解剖病理展などは予想を上回る来訪者があった。雨であったことも一因だが、晴れの1日目にもかなりの人が来てくれたようである。高校生らしい若者も多かったのは「人体の神秘展」などの影響なのかも知れない。

ここしばらく大学祭は雨にたたられている。開学記念日(11月2日)前後とした現行の開催時期を変えて、晴れの特異日とされる体育の日(10月の第2月曜)を含む連休期間にしてはどうかという案が学生委員会

提案された。土曜日を含めた3日間の休みが毎年確定しているというメリットもあり、大方の賛同を得て決まりかけたが、大学祭に欠かせないものの調達が困難であるとの意見でこの案はご破算になった。それはテントである。大学祭に使用されるテントは何と100張りにもなるそうで、大学の所有する分では全く足りず、市内外の学校から借りている。しかし、体育の日の時期はどの学校も運動会があり、テントを借りることはできない。結局、来年度の大学祭は従来通りの日程(10月30日-11月1日)で開催されることになった。

ところで、学生を預かる大学は、想定される南海大震災への対策を考える時期がきている。例えば、講義、実習中の大地震に教職員はどのように対処したら良いかまだ全く検討されていない。相当数のテントの備蓄も大学祭目的だけでなく必要なことのように思われる。



● 先端医療研究資源・技術支援センターから ●

## 先端医研のご利用には予約が必要です

先端医療研究資源・技術支援センター長 佐々木 卓也



ユーザーの皆様の研究を支援していく上で重要なことは、第一にその研究に必要な機器があるということだと思います。私共先端医研では、アンケートを頻繁に取り、ユーザーの皆様が現在必要としている機器の情報を得、その結果をもとに、あらゆる機会を捉えてリクエストの多い機器の購入申請をしております。もうひとつ重要なことは、先端医研の機器を必要な時にいつでも使用できるということです。そのために、多くの機器は24時間使用できる体制にしております。また、一部使用にあたり技術を要する機器については、

スタッフの指導を受けた後、時間外使用の許可申請(年度ごとに更新してもらいます)をすれば、使用できるようにしております。さらに、皆様が実験計画通りの時間に使用できるように、ほとんどの機器は予約して使用していただくことになっております。この1月より、先端医研では、ユーザーからのリクエストにお応えして、これまでの学内ランによる予約システムからWebで予約ができるシステムに変更しました。これでMac以外にWindowsでも予約できるようになりました。方法は簡単です。徳島大学医学部のホームページから先端医療研究資源・技術支援センターに入ってもらい、その予約簿のところをクリックしてください。ログインするのに必要なパスワードは、教室のユーザー代表が御存知です。この予約システムを使って、どんどん先端医研の機器をご利用いただきたいと思います(予約システムについてご不明な点があれば、いつでも内線2557にお電話ください)。



## 医学部 ニュース

**事業名** 2003年日・ASEAN 交流年記念事業  
- 食物と栄養・健康教育に関するアセアンフォーラム -

**日時(場所)** 平成15年12月1日~同年12月9日  
(ベトナム国立栄養研究所、バングラデッシュ中国・バングラデッシュ国際センター)

外務省より承認され「食物と栄養・健康教育に関するアセアンフォーラム」をJICA(独立行政法人国際協力機構)帰国専門家徳島県連絡会(太田房雄代表幹事)主催の下に実施し、太田房雄教授ら日本人5名、ベトナム人5名による食品衛生、公衆栄養、JICAの活動に関する講演が行われた。参加者は毎日50名前後で、会場横に設営した休憩所にて徳島大学の英文概要とJICAの活動を示す小冊子等が配付された。

バングラデッシュ会場では、「第10回アジア下痢疾患と栄養に関する国際学会」(参加総勢700名)サテライトシンポジウムの一部として、太田房雄教授、Sarkar, S.A. 博士両座長の下に太田房雄教授、城戸健一東北大学名誉教授、アジア諸国の研究者によりプロバイオティクス等に関する発表が行われた。また、特設展示ブースで徳島大学の英文概要、JICAの活動パンフレット等が配付された。関係各位のご協力に感謝します。



ハノイ国立栄養研究所で開会挨拶をする太田房雄教授



ダッカの会場で特設ブースに集まる学会参加者

## 医学部学友会からの報告

学友会総務部長 苜原 稔

医学部学友会は、医学部内にある各種学生サークルを統括する組織で、医学部や後援会からの補助金で運営されており、各サークルへの部費補助が活動の中心となっています。

さて、毎年夏期に開催される西日本医科学学生総合体育大会は、今年度（第55回）は神戸大学が主管で開催されましたが、本学は総合成績で44大学中12位と健闘しました。特に、弓道男子は優勝、バドミントン男子は準優勝と優秀な成績をおさめています。来年もさらに順位が上がるように頑張りたいと思います。

私が学友会のお世話をさせていただくようになって2年が経過しますが、学生に責任感、自主性、積極性を持った活動をするよう指導しています。その一環として、従来は補助金の分配が中心であった学友会自体の改革が必要と考え、学生自身による学友会改革特別

委員会を設置させ、改革を自分達の手で積極的に進めてもらっています。

その委員会では、1)各サークルへの補助金分配方法の見直し、2)学友会新規企画として、これからの受験生に向けたオープンキャンパスの折に、学友会活動をアピールすること、3)学友会ホームページを開設し、学友会活動を広報すること、4)医学部改築および校舎の改修に対して学生の立場で要望をしていくこと、などが検討されています。是非、実行させたいと思っています。

これからも、学生の自主的な取り組みを大事にしながら、楽しいキャンパスライフを創造して行く助けができればと考えております。保護者の方々や教職員の皆様の厚い御支援を期待しています。

## 徳島大学医学部後援会

後援会会長 仁木 敏 晴



活動が地味な会なのでよくは知らない方も多いと思いますが、本学部には表題に記した名前の後援会が組織されています。正会員は本学医学部および本学大学院医学研究科ならびに栄養学研究科に在籍している学生さんの保護者で構成され、入学された際に納入していただく会費

および入会金をもとに運営されています。

本会の主な目的は、医学部および大学院医学研究科ならびに栄養学研究科における教育と研究ならびに設備拡充を後援することにあります。例年行っております事業としては、お子様たちの入学式ならびに卒業式当日に行われる諸行事の補助、学生・学事の厚生補助、教育設備の充実に対する補助、教職員の教育研究に関する会議出席等の補助、毎年開催される医学部学生の西日本体育大会への参加の補助などがあります。これらの事業はお子様たちの学生生活において、国からの予算のみでは十分に運営されにくい部分がより円滑に行われることに役立っているものと考えております。

また別予算で、保護者の皆様から納入していただいている助成金でもって、徳島大学白菊会（医学の発展と人類の福祉に貢献するという崇高な理念のもとに、

ご遺体を医学部学生の解剖実習に寄付される意志を表明された方達の会）ならびに青藍会館（徳島大学医学部の卒業生の寄付によって建てられた同窓会館）の運営助成にも関与しております。

医学・医療の分野は殊のほか日進月歩の激しい領域であり、学生時代に修得しなければならない知識や技能は大変に膨大で、増加し続けております。また学生時代に医療人としての心構えをきちんと身につけることも大変重要なことです。教職に携わっていただいている方々には、いかにすれば効率のよい充実した教育ができるか、大変熱心に取り組んでいただいております。例えば授業も昔のような講義一辺倒のものではなくております。基本的な講義が終わった時点で小グループに分かれ、実習中心の学習が行われるようになっております。それも教員から一方的に教えるというのではなく、問題を提起し学生に考えさせる、いわゆる問題解決型の授業に変わってきております。

このように授業形態一つをとってみても、以前とは異なり多くの労力と場所が必要となってきております。微力ではありますが後援会の活動によって、お子様たちの勉学する環境がよりよい方向に整備されるように役立っていきたくと考えております。今後ともよろしくご指導、ご協力下さいますようお願い致します。

# 平成 15 年度「遺骨返還・感謝状贈呈式」及び「解剖体納骨式・追悼式」

平成 15 年度遺骨返還・感謝状贈呈式が、平成 15 年 12 月 5 日（金）14 時から蔵本構内の青藍会館大会議室において行われました。最初に医学部長から平成 15 年度に系統解剖実習に献体された故人の遺族に対し文部科学大臣及び医学部・歯学部両学部長からの感謝状を贈呈し、併せて遺骨の返還を行いました。その後、医学部長及び解剖学関係講座教授並びに医学部・歯学部の学生代表者が挨拶を行い、厳肅な雰囲気の中に終了しました。

引き続き、平成 15 年度解剖体納骨式・追悼式が 14 時 30 分から青藍会館東隣の解剖体慰霊碑前において行われました。遺族、白菊会会員、教職員並びに学生が多数参列し、献花を行い、御霊の冥福を祈りました。



## 医学・歯学・薬学部学務課 S D ワークショップ

### 仕事の改善とその方向 - 学生サービスのあり方 -

2003 年 11 月 18 日（火）17 時から医学部第 1 セミナー室において、大学開放実践センター森 和夫教授を指導者に招き、医学・歯学・薬学部学務課スタッフ全員が参加して S D ワークショップ「仕事の改善とその方向 - 学生サービスのあり方 -」を行った。

ワークショップは、笑いもある楽しい雰囲気で行うことができ、3 学部配置の各系の交流が図られたとともに、その後の学務課の業務改善に役立っている。

### ワークショップの概要

**目的** 医学・歯学・薬学部学務課の業務改善の一環として行った。

**内容** 前もって、学務課職員の「印象、良い点、悪い点こうして欲しい等」について、学生に対してアンケート調査を行った。

学務課職員を 3 グループに分け、アンケート調査の結果に基づき、それぞれのグループ毎に学務課の問題点（仕事の仕方、取り組み方、対応態度、能力等）をまとめた。

グループ毎に学務課の問題点の関係図を作成し、改善の具体的な取り組みについて、代表者が発表した。



安友康二教授（生体防御医学）が Nature Medicine に発表  
徳島新聞 平成 15 年 12 月 22 日 20 面

**徳大研究グループ**

この制御性T細胞除去する実験で、マウスは高い生存率を示した。世界の三傑が感染しているマラリアの病原菌に役立つ抗体、マウス実験ではマウスに感染させない抗体を産生するマウスを交配して、マウス実験に用いる。

**免疫逃れるマラリア原虫**

マラリア原虫と免疫の仕組み

マラリア原虫は、赤血球を侵入して増殖する。その過程で、赤血球の表面に赤血球受容体（CD47）を付与し、マラリア原虫の増殖を抑制する。マラリア原虫は、赤血球の表面に赤血球受容体（CD47）を付与し、マラリア原虫の増殖を抑制する。マラリア原虫は、赤血球の表面に赤血球受容体（CD47）を付与し、マラリア原虫の増殖を抑制する。

**マウス実験 仕組み説明**

新治療薬の開発に期待

マラリア原虫は、赤血球を侵入して増殖する。その過程で、赤血球の表面に赤血球受容体（CD47）を付与し、マラリア原虫の増殖を抑制する。マラリア原虫は、赤血球の表面に赤血球受容体（CD47）を付与し、マラリア原虫の増殖を抑制する。

今までのマラリア研究も毎年3億人以上が感染を遂げ、有効治療薬は100人以上が死を遂げる。また、がん治療にマラリア原虫を利用する研究も進む。マラリア原虫は、赤血球を侵入して増殖する。その過程で、赤血球の表面に赤血球受容体（CD47）を付与し、マラリア原虫の増殖を抑制する。マラリア原虫は、赤血球の表面に赤血球受容体（CD47）を付与し、マラリア原虫の増殖を抑制する。

## 第2回(平成15年度)徳島新聞医学研究助成金

昨年からスタートした徳島新聞医学研究助成金の表彰式が、平成15年12月15日に医学部長室において行われました。受賞者は次のとおりです。

教官の部 発生発達医学講座 澤田 和彦

学生の部 病態情報医学講座 MOE KYAW



(左から曾根学部長、澤田助教、MOE KYAWさん、徳島新聞社会文化事業団宇尾常務理事、玉置教授)

## ご意見箱

学務課の業務改善のため昨年12月1日から学務課事務室前に意見箱を備えています。学生の皆さんの声をお待ちしています。



## M.D.-Ph.D. コースの紹介

大学院医学研究科プロテオミクス医科学専攻 博士課程1年  
生体制御医学講座分子病態学分野 坂根 亜由子



今回、M.D.-Ph.D. コースを紹介する原稿ということで依頼をいただきましたが、同様にこのコースに進学した井澤さんや川添君が医学部だより等で何度かコースの紹介をすでにしているの、私は私個人のことを少し書かせていただきたいと思います。

このコースに進学してから早いもので1年が経とうとしています。私の場合は学部生2年の終わり頃から佐々木教授の教室(分子病態学分野)で実験のお手伝いなどをさせていただいたりしてお世話になっていましたので、そこから数えると実質3年になります。

私が佐々木先生の研究室に通わせていただくようになったのは、研究をしようという意欲に燃えていたわけでもなければ、特に研究に興味があったわけでもありません。将来は臨床医となって多くの「ひと」を救いたいと考えている私にとって、これから先全く無縁であろう世界を一度は見てみたいと思っただけでした。そのような私がなぜ将来は臨床医となり、かつ研究をすることで多くの病気の解明に貢献したいと思ってM.D.-Ph.D. コースへの進学を決意するまでに変わったかということ、やはり佐々木先生を通して学んだ多くの事が一番の要因だと思っています。それまでずっと研

究と臨床はまったく別のものとしてとらえていたものが、臨床における研究の意義を知り、臨床でより多くの「ひと」を救うにはむしろ研究が必要なのだということを実感しました。また、学問(研究)をするということの楽しさを知ることができました。そのような経緯で進学を決めたわけですが、進学後は研究のみに専念することができ、講義や実習があつて思うように実験の時間がとれなかったり、試験との両立に苦しんでいた学部生の頃に比べて、とても楽になりました。しかし、この1年間は楽しいだけではなく苦しいことも多々あり、何度となく壁につきあたり悩みました。改めて学問をするということの苦しさ、難しさ、奥深さを感じています。私にはまだまだ学ぶべきことが多いと反省させられる毎日です。今後も初心を忘れることなく一生懸命がんばっていきたいと思います。

最後になりましたが、M.D.-Ph.D. コースに進学の際には多くの先生方のお世話になりました。また、進学後もいろいろとご支援をいただいております。この場をお借りして御礼申し上げます。そして、弟子入りしたばかりの頃は本当にどうしようもなく鈍くさかった私でしたが、見捨てず、粘り強く指導してくれている師匠に感謝したいと思います。

発行者 医学部長 曾根三郎

編集委員長 広報委員長 武田憲昭

編集委員 広報委員 泉 啓介、足立昭夫、水口和生、太田房雄、原田雅史、平井 宏、森口博基

総務課 眞崎良一、津川咲子

医学部だよりへのご意見・ご要望は、こちらへお願いします。

Tel:088-633-9117 Fax:088-633-9431 E-mail:isysoumu1k@jim.tokushima-u.ac.jp

URL <http://www.hosp.med.tokushima-u.ac.jp/university/servlet/index>